

2つのソーシャル・キャピタル概念 ——社会的凝集性と社会的ネットワーク——

成蹊大学 渡邊大輔

1 目的

ソーシャル・キャピタル（以下 SC と略記）の理論的理解と実証のための測定において、これまで大きく「社会的凝集性」と「社会的ネットワーク」に基づく2つのアプローチがとられてきた（表1）。前者はSCを地域や集団がもつ特性として理解し、その特性が成員におよぼす社会的な影響＝文脈効果を重視するものである（Berkman & Kawachi 2000）。後者は、SCを個人がもつ特性として理解し、その特性が個人の行為におけるリソースとして機能する点を重視する（Lin 2001）。両者のアプローチは、さまざまな実証研究において有効性が報告されているものの、概念整理はまだ途上にある。そこで本報告では、人びとの健康を題材として分析することで、2つのSC概念の特質をあきらかにする。

表1 2つのソーシャル・キャピタル概念の比較

アプローチ	測定単位	着目点	主な分析手法
社会的凝集性	個人, 集団	集団の特性がもつ文脈効果	階層線形モデル
社会的ネットワーク	個人 (集団)	行為のリソースとしての機能	回帰分析, ネットワーク分析

2 方法

データとして2012年3～4月に実施した「地域の絆と健康に関する調査」（関東甲信越地方に居住する40～79歳の男女を対象とした郵送質問紙調査、計画標本3,000名（50自治体×60名）、回収数1,487人、有効回収率49.6%）をもちい、欠損のない857人を分析対象とした。従属変数は、健康への主観的な評価として健康度自己評価、健康への行為として体操教室への参加経験をもちいた。独立変数は、社会的凝集性に基づくSCとして、近隣のコミュニティネスと一般的信頼をもちい、各市町村の平均値を地域レベルの指標とした。社会的ネットワークに基づくSCとして、3種類の社会的サポートのサイズ、地縁組織、サークル活動、ボランティア・NPO、同業者団体への参加の有無、およびポジションジェネレーター（Lin 2001）をもちいた。基本属性を統制し、階層線形モデルと重回帰分析、ロジスティック回帰分析をもちいて分析した。

3 結果

健康度自己評価を分析した結果、社会的凝集性に基づくSCは個人レベルのコミュニティネスと一般的信頼、地域レベルの一般的信頼がいずれも有意な正の効果をもっていた。対して、社会的ネットワークに基づくSCはいずれも有意ではなかった。体操教室への参加経験を分析した結果、健康度自己評価とは逆に、社会的凝集性にかかわるSCはいずれも有意ではなく、個別の分析において手段的サポートと同業者団体への所属以外はいずれも有意な正の効果をもっていた。

4 結論

2つのSCは、健康への主観的な評価と行為に異なる影響をもっていた。すなわち、2つのSCは異なる次元における影響力を測定しており、異質の概念である。SCという言葉は、アプローチや測定とともに説明しなければもちいることができない概念であり、両者の架橋がSCの実証研究における課題といえる。

文献

Berkman Lisa F., Ichiro Kawachi, eds., 2000, *Social Epidemiology*, New York: Oxford University Press.

Lin, Nan, 2001, *Social Capital: A Theory of Social Structure and Action*, Cambridge: Cambridge University Press.